（財）大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第51輯

都市計画道路・府道磯之上山直線建設に伴う

軽部池西遺跡・Ⅱ

―― 発掘調査報告書 ――

1990

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

(財) 大阪府埋蔵文化財協会調査報告書　第51輯

都市計画道路・府道磯之上山直線建設に伴う

軽部池西遺跡・Ⅱ

―― 発掘調査報告書 ――

1 9 9 0

財団法人 大阪府埋蔵文化財協会

序　　文

軽部池西遺跡は、「法隆寺伽藍縁起並流記資材帳」に見える同寺の所領に比定されている「軽部池」の北西に拡がる縄文時代から弥生時代、古墳時代を経て、古代、中世、近世へと至る複合遺跡です。しかし既往の調査では、都市計画道路、府道磯之上山直線建設に伴い、弥生時代中～後期の竪穴住居址や土壙群、中世の掘立柱建物址等を若干検出したのみで遺跡本体を確認するまでには至っていません。

今回の調査結果については本報告書に詳しく記述しているところでありますが、「軽部池」に西接して存在する廿池の堤塘並びに池底が対象で、廿池の築造時期、手法と池築造前の遺構、遺物の検出を主目的に実施しました。しかし残念ながら諸般の事情で所期の目的を十分に達せられなかったのは残念の極みです。

本報告書が軽部池西遺跡のみならず古代史解明の資料として、利用されることを願って止みません。

最後に調査の実施にあたり、種々ご配慮いただきました大阪府土木部岸和田工事事務所をはじめ関係者各位に謝意を表すると共に、特に貴重な人材を直接派遣いただいています近畿府県教育委員会並びに大阪府下市町教育委員会に対し深謝申し上げます。

平成２年３月

財団法人　大阪府埋蔵文化財協会

理事長　仁賀奈　祐　吉

例　　言

1．本書は、都市計画道路・府道磯之上山直線予定地内に所在する、軽部池西遺跡（その2）の発掘調査報告書である。

2．調査は、大阪府土木部岸和田土木事務所の委託をうけ、大阪府教育委員会文化財保護課の指導のもとに、財団法人大阪府埋蔵文化財協会が実施した。

3．調査は、財団法人大阪府埋蔵文化財協会技師　山本　彰・佐々木好直を担当者として実施した。現地での調査期間は下記の通りである。

昭和63年９月24日～昭和63年12月６日

4．調査の実施にあたっては、大阪府土木部岸和田土木事務所・岸和田市教育委員会および地元関係各位の協力を得た。

5．本書で用いた土壌色および土器類の色調は、小山正忠・竹原秀雄編著『新版標準土色帖』５版（1976）による。

6．本遺跡では、種子・昆虫遺体が出土した。前者は大阪市立大学教授粉川昭平先生、後者については大阪市立自然博物館主任学芸員宮武頼夫先生にそれぞれ鑑定を依頼した。

7．遺構の写真撮影は調査担当者、遺物の写真撮影は小倉　勝が担当した。

8．本書の執筆は調査担当者があたり、編集は山本が担当した。

9．本遺跡では、花粉分析、珪藻分析・火山灰分析を実施した。これらの報告書については当協会の資料班において保管している。

本　文　目　次

序文

例言

第Ⅰ章　調査に至る契機と経過……1

　第１節　調査に至る契機……1

　第２節　調査の経過と方法……1

第Ⅱ章　位置と環境……3

　第１節　軽部池西遺跡の位置……3

　第２節　地理的環境……5

　第３節　考古学的環境……5

第Ⅲ章　調査の成果……8

　第１節　調査区の設定……8

　第２節　検出遺構……11

　　01－ＯＲ……11

　　02－ＯＲ……11

　　03－ＯＲ……13

　　04－ＯＳ……13

　　05－ＯＸ……13

　　06－ＯＳ……13

　第３節　出土遺物……14

　　03－ＯＲ……14

　　04－ＯＳ……17

　　05－ＯＸ……17

　　包含層出土土器他……17

第Ⅳ章　まとめ……18

挿図・写真目次

第１図　軽部池西遺跡の位置……3
第２図　軽部池西遺跡周辺の地質……4
第３図　山ノ内遺跡検出遺構の一部と竪穴住居内出土遺物の一部……6
第４図　軽部池西遺跡周辺の遺跡分布……7
第５図　調査地の位置……8
第６図　軽部池西遺跡平面図・土層断面図……9・10
第７図　02－ＯＲ（II区）土層断面図……11
第８図　03－ＯＲと土層断面図……12
第９図　05－ＯＸ土層断面図……13
第10図　03－０Ｒ他出土遺物……14
第11図　03－０Ｒ出土木製品……16
写真１　種子選別状況……2
写真２　レッカーによる空測風景……2

図　版　目　次

図版１　軽部池西遺跡と周辺の航空写真
図版２上　遺跡１区　01－ＯＲ
　　下　遺跡１区　01－ＯＲ断面
図版３上　遺跡１区　01－ＯＲ肩部
　　下　遺跡１区　01－ＯＲ肩部断面
図版４上　遺跡II区　01－ＯＲ
　　下　遺跡II区　01－ＯＲ断面
図版５上　遺跡II区　01－ＯＲ
　　下　遺跡II区　01－ＯＲ断面
図版６上　遺跡II区　01－ＯＲ

下　遺跡II区　01－ＯＲ自然木出土状況
図版７上　遺跡Ｉ・II区　02－ＯＲ
下　遺跡Ｉ・II区　02－ＯＲ
図版８上　遺跡II区　02－ＯＲ
下　遺跡II区　02－ＯＲ断面
図版９上　遺跡Ｉ区　03－ＯＲ断面
下　遺跡Ｉ区　03－ＯＲ遺物出土状況
図版10上　遺跡１区　03－ＯＲ土器出土状況
下　遺跡１区　同　上
図版11上　遺跡III区　03－ＯＲ
下　遺跡III区　03－ＯＲ断面
図版12上　遺物　03－ＯＲ出土土器
下　遺物　03－ＯＲ・04－ＯＳ・05－ＯＸ出土土器
図版13上　遺物　03－ＯＲ出土木製品
下　遺物　03－ＯＲ出土石器と包含層廿池内表採遺物
図版14　自然遺物

第１章　調査に至る契機と経過

第１節　調査に至る契機

軽部池西遺跡の発掘調査の契機となった都市計画道路・府道磯之上山直線は、大阪臨海線磯之上地区と大阪外環状線積川地区を結ぶ道路で、関西新空港関連の道路としての位置づけがなされている。路線内の遺跡の取り扱いについては、大阪府教育委員会と大阪府土木部が協議を重ね、昭和58年に大阪府教育委員会が路線内の分布調査[注1]を実施し、軽部池西遺跡を含めて新たに11ヶ所の遺跡が周知されるに至った。この分布調査の成果をもとに大阪府教育委員会と大阪府土木部は再び協議を行い、道路予定地内は全線にわたって試掘調査が必要であるとの基本方針が確認された。

その後、上記の基本方針に沿って昭和59年度には、大阪府教育委員会によって、今木廃寺の発掘調査並びに箕土路遺跡・西大路遺跡・軽部池西遺跡・三田遺跡の試掘調査が実施され、いずれも遺構・遺物が検出されている。昭和60年度になると当協会の発足に伴って調査の主体が移管され、現在までに軽部池西遺跡をはじめとして箕土路遺跡・西大路遺跡今木遺跡・山ノ内遺跡・山直北遺跡・三田遺跡・上フジ遺跡・二俣池北遺跡・水込遺跡・黒石遺跡・山直中遺跡が一部を除いて終了[注2]している。

都市計画道路・府道磯之上山直線内の軽部池西遺跡については、既に大阪府教育委員会と当協会によってその大半の発掘調査が実施されている。それらの調査成果についてはそれぞれの報告書[注3]に詳しいが、縄紋時代の流路や弥生時代中期の土坑・弥生時代後期の竪穴住居等が検出されている。今回の調査区は軽部池西遺跡東端で東側を山ノ内遺跡に接する廿池内がその対象となった。

第２節　調査の経過と方法

発掘調査は廿池内と東側の堤部分が対象となったため農閑期である秋の収穫後が選ばれるとともに工期の短縮をはかる目的から池内については擁壁部分についてのみの調査を実施することとなった。調査はまず池内のヘドロをケミコ処理することと進入路をつくることからはじまったが、結果的にはケミコ処理によって池底に僅かに残存した包含層を攪乱する結果となり、今後の池内の発掘調査に教訓を残すこととなった。その後機械掘削を昭

和63年10月17日に着手し、12月３日にすべての作業を終了した。

調査方法は、ヘドロ処理層および表土層を機械掘削によって除去した後、包含層の人力掘削を実施し遺構面を検出し遺構の掘削を行なった。調査区の遺構の全体図の作成にあたっては空中撮影による図化を基本方針としたが、調査が終了した部分から逐次本体工事に引き渡すという工程がとられたため、必然的に調査区が区切られ、小面積ごとに図化をする必要が生じた。このため空測にあたってはレッカーによる撮影を10月29日・11月７日・11月19日・12月３日の４回に分けて実施し図化を行なった。

写真１　種子選別状況

写真２　レッカーによる空測風景

なお、発掘調査における遺構の実測および遺物の取り上げは、当協会の定める『発掘調査規程』[註4]『によって国土調査法に基づく新平面直角座標の第Ⅵ座標系を使用し、区画の基本は大阪府発行の１／2500地形図（大Ｄ－４－10）を12等分して、500ｍ×500ｍの方形区画をつくり、更にこれを25等分し、100ｍ×100ｍの方形区画をつくり、最終的にこれを625等分して４ｍ×４ｍの小区画で実施している。

［註］

（１）大阪府教育委員会『三田遺跡試掘調査概要』1985年

（２）これらの報告書については逐次当協会の埋蔵文化財調査報告書として出版されている。

（３）大阪府教育委員会『軽部池西遺跡試掘調査概要報告書』II1985年

（財）大阪府埋蔵文化財協会『軽部池西遺跡－発掘調査報告書－』1988年

（４）（財）大阪府埋蔵文化財協会調査課『発掘調査規程』1985年

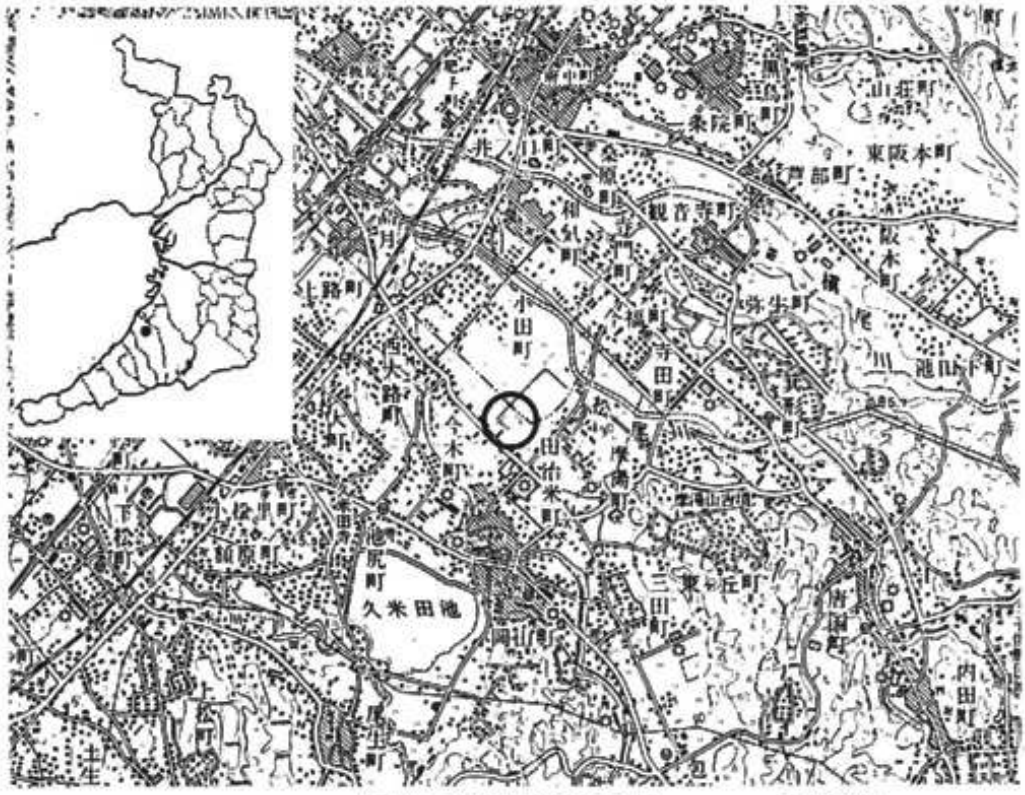
第II章　位置と環境

第１節　軽部池西遺跡の位置

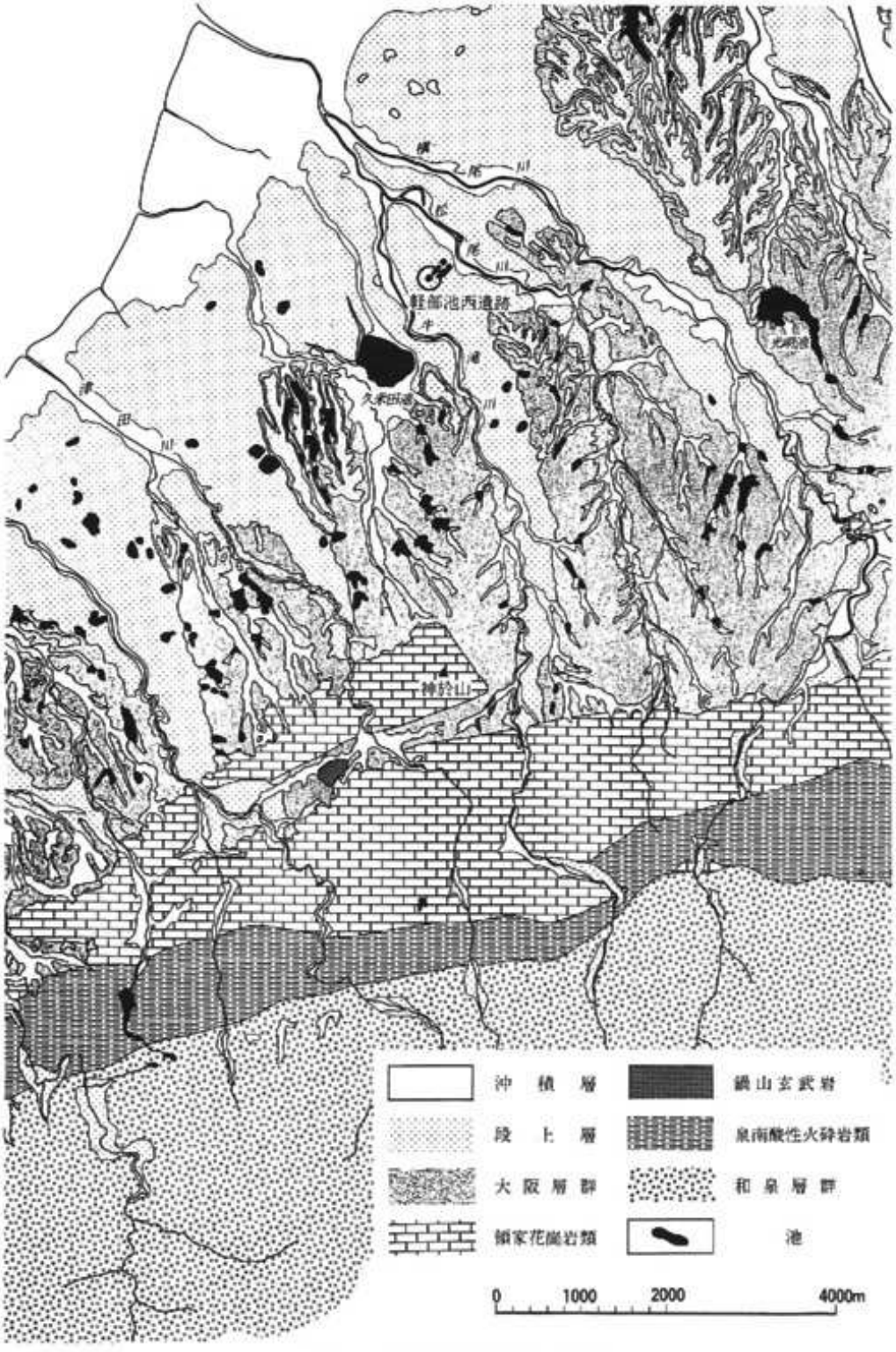
軽部池西遺跡の所在する岸和田市は、大阪府の南部に位置している。市域は南北に長く面積は、70.65㎢をはかり、大阪の衛星都市としての機能を有しており、大阪府と和歌山県を結ぶ、ＪＲ阪和線・南海本線や第２阪和国道の便利さと、更には発掘調査の端緒となった都市計画道路・府道磯之上山直線の開通とともに今後増々発展していくことであろう。

岸和田市は前面に大阪湾、後背に和泉山脈を擁し、山地から海岸線へと変化に富んだ自然地形を、津田川・牛滝川をはじめとする多くの河川とともに構成している。行政上は北および東側を忠岡町・和泉市に隣接し、西側を貝塚市に隣接し、南側は葛城山頂を自然境界として和歌山県に接している。

軽部池西遺跡は岸和田市今木町に所在する。ＪＲ阪和線『和泉府中駅』の南方2.3㎞、



第１図　軽部池西遺跡の位置　　１：50000



第２図　軽部池西遺跡周辺の地質

泉州地域最大の溜池として知られる久米田池からは北方1.5km付近に位置しており、遺跡の東端の北側には、「法隆寺伽藍縁起并流記資財帳」（天平19年）に記載のある軽部池が所在している。

第2節　地理的環境

和泉地方は、和泉山脈から派出する丘陵とその前縁にひろがる洪積段丘および主として海浜部にひろがる沖積平野によって形成されている。丘陵部は北方あるいは北西方向にのびるものが中心で、丘陵間には狭い谷が奥深くまで入り込み、この谷間を縫うように和泉山脈から河川が大阪湾へ流れている。第2図でも明らかなように洪積段丘は大きな谷部にもひろがるが、主として丘陵の前縁部に大きくひろがり、丘陵部とあわせて和泉地方の地形の大半を占めている。洪積段丘は、高位・中位・底位の3つに分類されるが、高位段丘は和泉地方では、和泉市信太山および観音寺付近、岸和田市の久米田池南方、泉佐野市見手川左岸にみられる。中位段丘は、岸和田・貝塚・泉佐野・樽井付近と槇尾川中流沿いにひろがり、低位段丘は、大津川・佐野川・樫井川沿いにひろがりをみせている。沖積平野は大阪湾沿岸にひろがっている。

軽部池西遺跡は、地形分類上は午滝川右岸に形成された低位段丘面の標高約21～23m付近に立地している。今回の調査地は軽部池に接する廿池内と東側の堤部分にあたるが調査地の北東は田園地帯がひろがり、和泉国特有の条里地割が遺存しており、地形的な景観を特徴づけている。

第3節　考古学的環境

次に軽部池西遺跡周辺の考古学上の成果を都市計画道路・府道磯之上山直線の既応の調査を中心にみてゆくことにする。

縄文時代は、山ノ内遺跡において縄文晩期の土器棺墓が検出されている。また山ノ内遺跡では後期を中心として比較的まとまって土器が出土している。

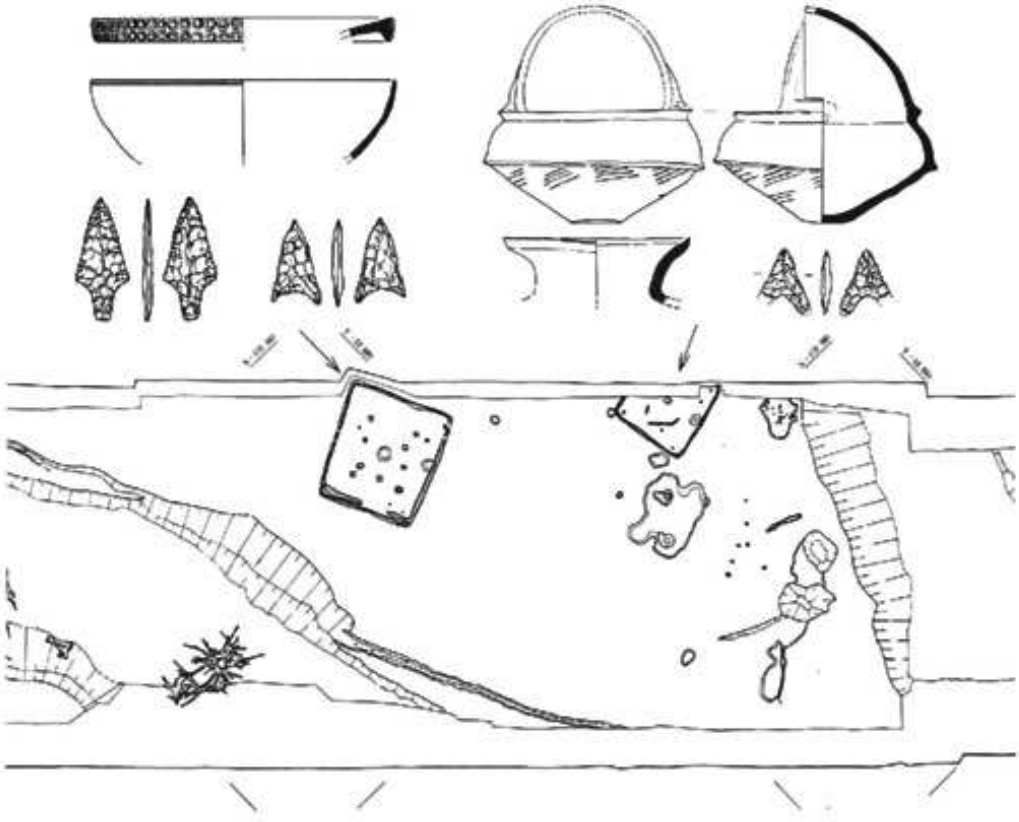
弥生時代では、竪穴住居址が検出された遺跡として西大路遺跡・今木遺跡・山ノ内遺跡・軽部池西遺跡がある。いずれも後期に属しているが集落のまとまりを検出するには至らない。このうち今回の調査地の東方に接する山ノ内遺跡では2棟の方形の竪穴住居址が検出されており、うち一棟からは手焙形土器が出土している。

古墳時代では東山丘陵の先端に周濠を有する全長約200mの規模を誇る摩湯山古墳が築

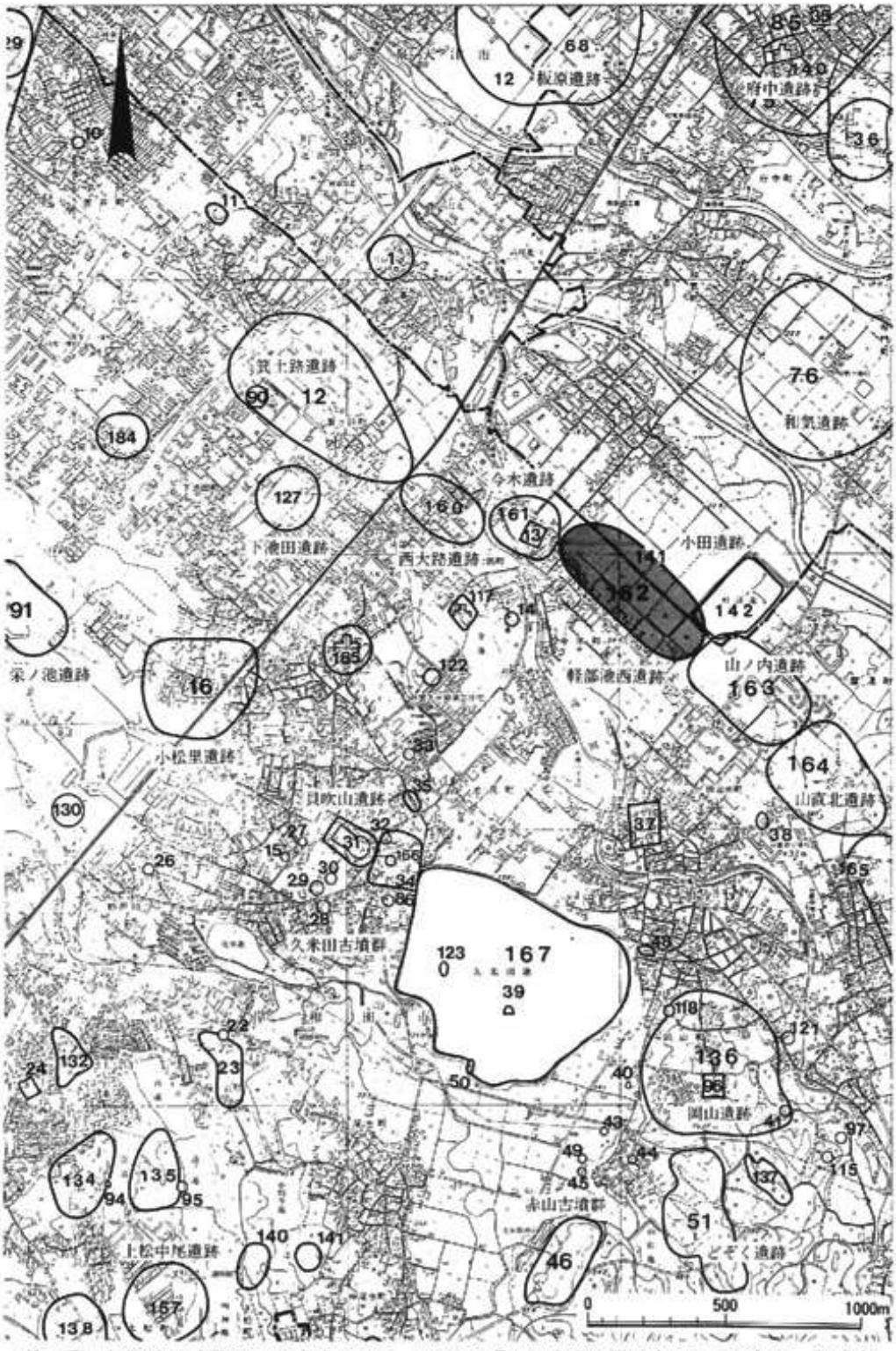
かれており、鰭付円筒埴輪や陪塚の年代観から前期末の所産と考えられている。また久米田池の西方には、摩湯山古墳にやや遅れて久米田池古墳群が築かれる。古墳時代の集落は、山直北遺跡・三田遺跡・上フジ遺跡・二俣池北遺跡において検出されている。いずれも中期・後期に属するもので竪穴住居が主流をしめているが、集落が継続する遺跡では、六世紀末から7世紀初頭に掘立柱建物に変化することが判明している。

奈良時代の掘立柱建物は、山直北遺跡・三田遺跡・二俣池北遺跡・水込遺跡でまとまって検出されており山直郷の一画をなすものと推定されている。

中世の集落は、まとまりをもったものとして山直中遺跡の掘立柱建物をあげうるが大きく12世紀後半から13世紀前半のものと14世紀後半から15世紀前半のものに大別されるらしい。また今木遺跡では、現存条里と同一方向の道路状遺構（13世紀後半）が検出されている。なお、本来は今木遺跡内に包括される今木廃寺では、出土瓦でみる限り平安時代には創建がなされるようで、14世紀末まで存続したことが知られている。また今木廃寺では、12世紀後半の庭園に伴う池遺構（園池）が検出されている。



第3図 山ノ内遺跡検出遺構の一部と竪穴住居内出土遺物の一部（土器1/6・石器1/3・遺構1/400）

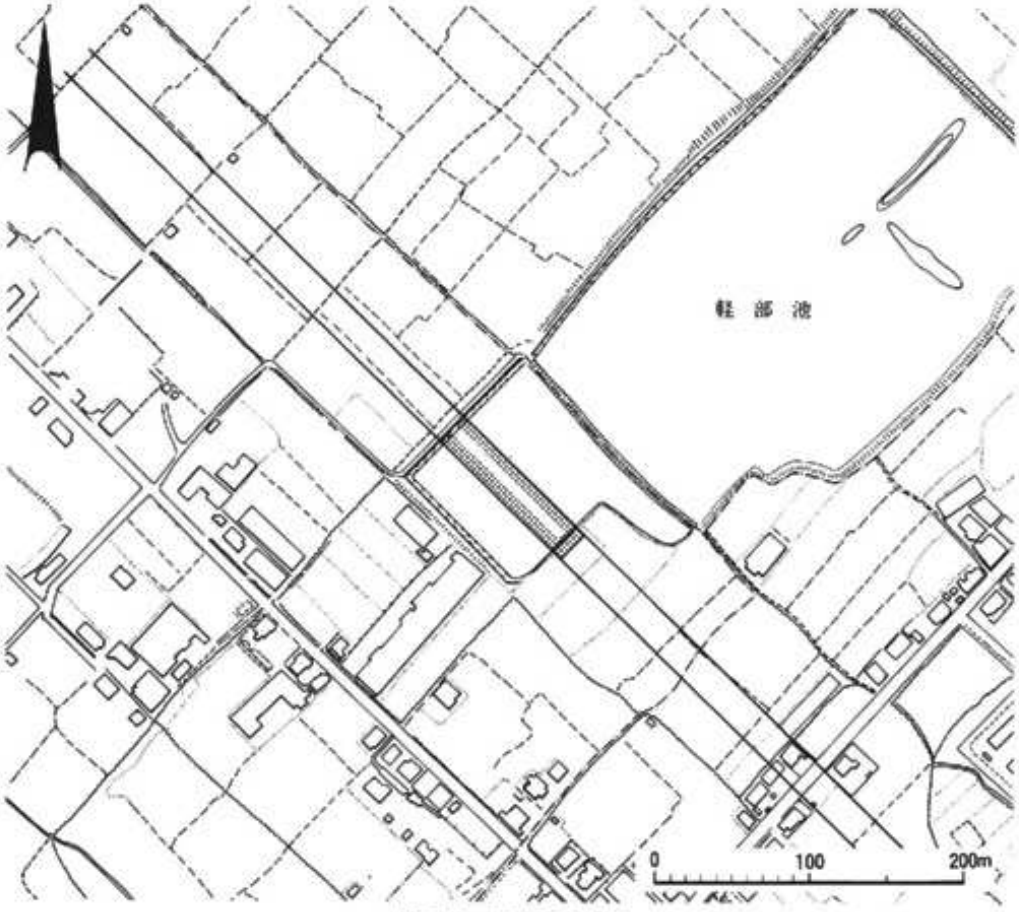


第４図　軽部池西遺跡周辺の遺跡分布（１：25000）『大阪府文化財分布図』1986年を一部改変

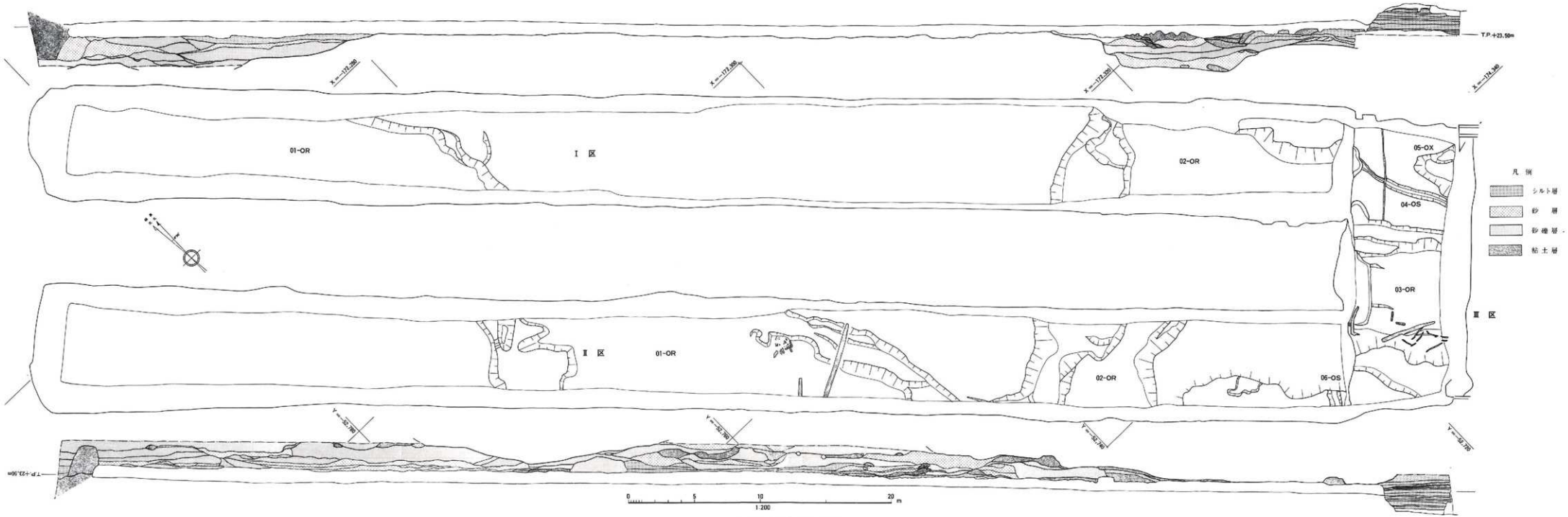
第Ⅲ章　調査の成果

第１節　調査区の設定

今回の発掘調査区は大きく廿池内とその堤部分に分けることが可能である。廿池内については進入路の確保と工期の短縮を計る目的から両側の擁壁部分の調査に留まったため結果的には池内に底部で幅約５ｍ、長さ約100ｍの調査区が２本平行して設定されることとなった。このうち便宜上北側の調査区をＩ区、南側をII区と呼称することとした。堤部分は、Ｉ・II区の東側にあたり山ノ内遺跡Ａ地区の西端に接する部分でこれをIII区と呼称することとした。調査は本体工事との関係からＩ・II区の西側から順次調査を実施し、本体工事との調整を行なった。



第５図　調査区の位置



第6図　軽部池西遺跡平面図・土層断面図

第２節　検出遺構

発掘調査で検出された遺構に自然河川・溝・土坑があり、調査地の大半は自然河川が占める。以下各遺構毎に詳述する。なお、遺構の表記方法については当協会の『発掘調査規程』に基づいて記号を用いて表記し、通常の名称を併記した。

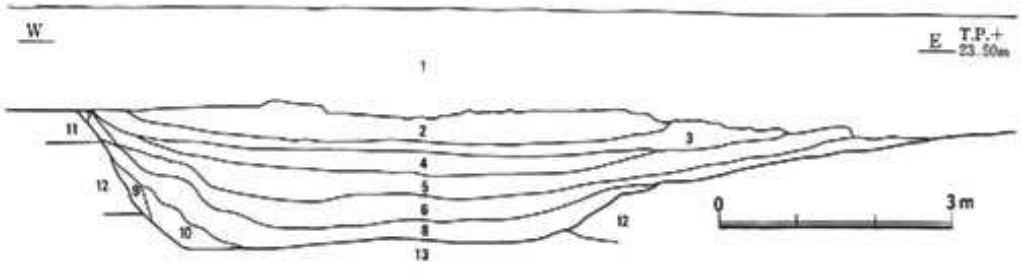
01－ＯＲ（自然河川１）第６図　図版２～６

Ｉ区・II区にまたがって検出した。南北方向にのびる自然河川であるが川幅が広く東岸を検出したにすぎず西岸は調査区内では検出できなかった。調査区内で判明する河川の規模は、幅26m以上でその主軸方向は調査区内でも一定でないが概ねＮ－16°－Ｅである。深さについては約2.70mまで確認したにとどまり川底を確認するには至っていない。

埋土は砂と砂礫を主体としているが、部分的に粘土や腐植物を多量に含むシルト層がみられた。埋土からは大小さまざまな自然木とともに種子が比較的まとまって出土したが、年代の判明する遺物は全く出土せず時期は不明であるが、花粉分析による花粉分帯からみる限りでは弥生時代中期以前である可能性が高い。

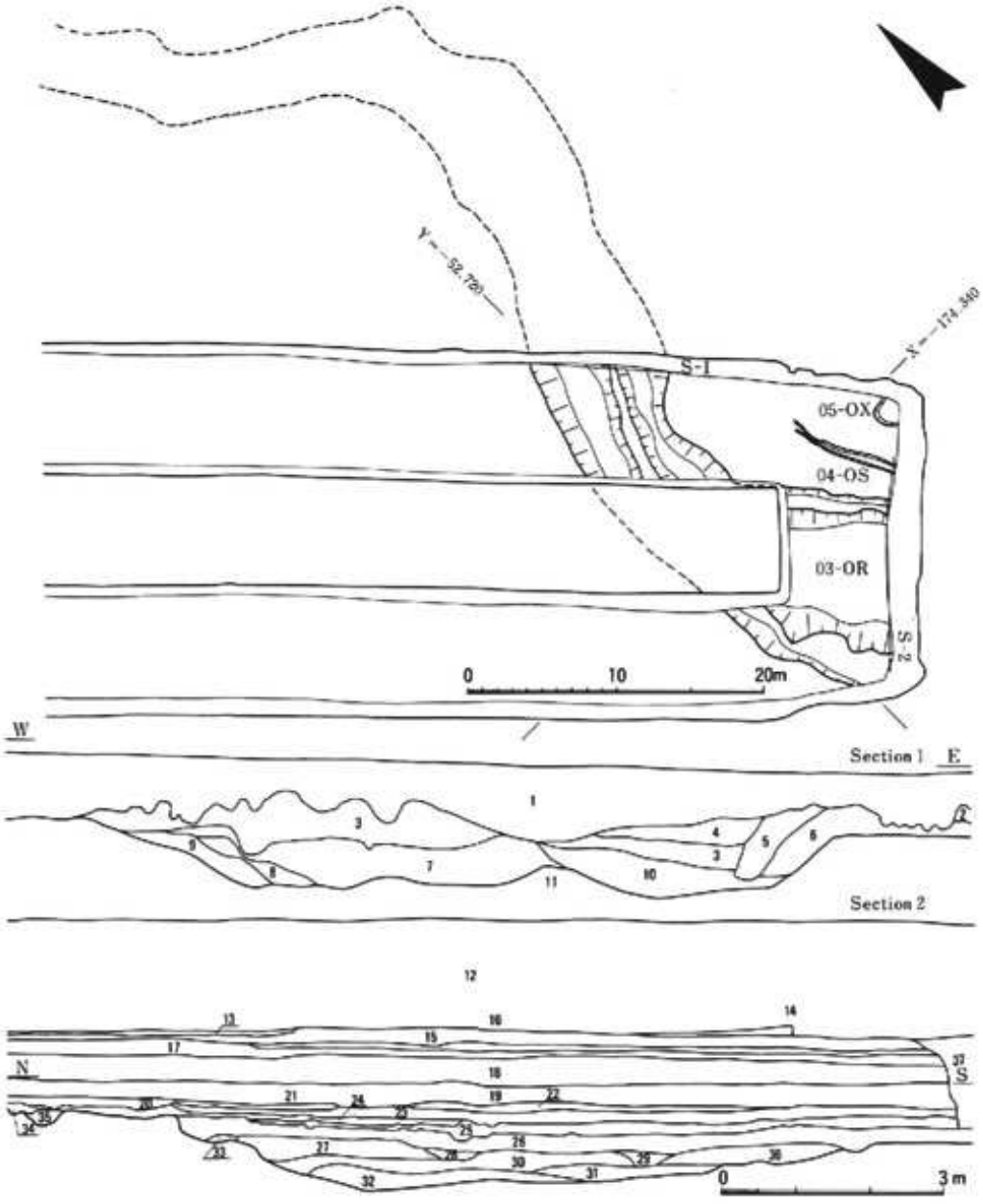
02－ＯＲ（自然河川２）第６・７図　図版７・８

Ｉ区・II区の東側で検出した自然河川である。平面形は不整形であるがその主軸は、Ｎ－55°－Ｅで、幅Ｉ区では約18m、II区では約12mをはかる。深さは約1.8～2.5mで、埋土はＩ区では砂礫が中心であったが、II区では粘土とシルトを主体としていた。II区の南側壁では01－ＯＲと接するがヘドロのケミコ処理が地山の礫層にまで達しており切り合いによる前後関係を明らかにすることはできなかった。埋土からの出土遺物は全く無く年代決定は困難であるが、Ｉ区では後述する弥生時代後期には埋没していたと考えて差し支え



1．ヘドロ層　2．7.5GY4/1暗緑灰色砂混りシルト　3．2.5Y3/3暗オリーブ色粘土　4．7.5Y4/1灰色粘土
5．5Y4/1灰色粘土(腐植物含む)　6．5Y4/1灰色砂と灰色シルトの互層　7．5Y3/1オリーブ黒色砂混りシルト
8．5Y3/1オリーブ黒色粘土　9．5Y2/2オリーブ黒色粘土　10．11の崩れた土層　11．10GY5/1緑灰色砂質シルト
12．5Y4/1灰色砂礫　13．5Y4/1灰色砂礫(12より大)

第７図　02－ＯＲ（II区）土層断面図



1. ヘドロ層　2. 5Y3/1オリーブ黒色粘土　3. 5Y7/3浅黄橙色粘土　4. 5Y2/1黒色粘土　5. 5Y3/1オリーブ黒色粘土
6. 5G6/1緑灰色砂質シルト　7. 5Y5/2灰オリーブ色粗砂(部分的に腐植物層有り)　8. 2.5Y5/3黄褐色粘土　9. 5Y5/1灰色粘土
10. 5Y8/3灰黄色粘土　11. 5Y4/1灰色砂礫　12. 盛土　13. 5B6/1青灰色シルト　14. 2.5Y7/8黄色砂質シルト
15. 2.5Y7/6明るい黄褐色砂質シルト　16. 2.5Y4/4黄褐色砂質シルト　17. 2.5Y7/8黄色砂質シルト　18. 2.5Y6/2灰黄色砂質シルト
19. 5Y5/2灰オリーブ色砂質シルト　20. 2.5Y5/6黄褐色砂質シルト　21. 2.5Y5/6黄褐色砂混りシルト
22. 5Y6/3オリーブ黄色砂混りシルト　23. 5Y5/1灰色シルト　24. 5Y4/2灰オリーブ色シルト　25. 5Y3/1オリーブ黒粘土
26. 2.5Y4/4オリーブ褐色シルト　27. 5Y3/2オリーブ黒色シルト　28. 5Y3/2オリーブ黒色砂混りシルト　29. 5Y3/2オリーブ黒色シルト
30. 5Y4/1灰色砂礫　31. 5Y3/2オリーブ黒色砂質シルト　32. 5Y4/3時オリーブ色粗砂　33. 5Y4/1灰色微砂
34. 5Y5/2灰オリーブ色砂混りシルト　35. 5Y2/2オリーブ黒色シルト　36. 5Y4/1灰色シルト　37. 撹乱

第8図　03－ＯＲと土層断面図

ない03－ＯＲに重複し切られていることから弥生時代後期より以前の年代を与えることが可能である。

03－ＯＲ（自然河川３）第６・８図　図版９～11

Ｉ区・II区の東端部とIII区において検出した北流する自然河川で、山ノ内遺跡Ａ地区における078－ＯＳと同一河川である。その流路はIII区ではほぼ調査区に平行するが、Ｉ区に至って北方向へ流路をまげる。調査区の北側の池底内をボーリングによって調査したところ流路はＩ区から更に北側へのびその後西方向へ蛇行することが判明している。河川の規模はＩ区を参考にすると幅約10m、深さ約１ｍをはかるが底面の形状は一様でない。

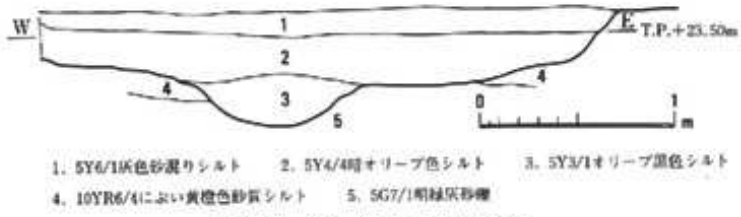
埋土は上下二層に大別することが可能で、上層はオリーブ褐色シルト～浅黄橙色粘土を主体としており、下層は灰オリーブ粗砂～オリーブ黒色砂を主体としていた。このうち下層からは、壺・高杯をはじめとする弥生時代前期から中期に属する弥生土器・縄紋時代と考えられる石鏃・木製鍬の未製品が出土している。また、下層では部分的に腐植物層が存在しており多量の種子が出土している。

04－ＯＳ（溝４）第６・８図　図版11

III区の東側で検出した。03－ＯＲとほぼ平行し北流する。位置からみて山ノ内遺跡Ａ地区の878－ＯＳと同一と考えられる。北端は池によって削平されており、長さは約7.40mを検出したにすぎない。溝の規模は幅約60cm、深さ約20cmで断面は「Ｕ」字形を呈している。埋土はオリーブ黒色シルトの単純層で、内部より弥生時代後期と考えられる土器片が出土している。

05－ＯＸ（不明遺構５）第６・８・９図　図版11

III区の東側隅部で検出した。遺構の大半は調査区外へのびるため本来の規模は不明であるが現状で南北3.80m、東西3.20m、深さ0.76mをはかる。埋土は第９図に図示したように三層に分離することが可能である。このうち最下層より弥生土器片が出土している。



第９図　05－ＯＸ土層断面図

06－ＯＳ（溝６）第６図　図版７上

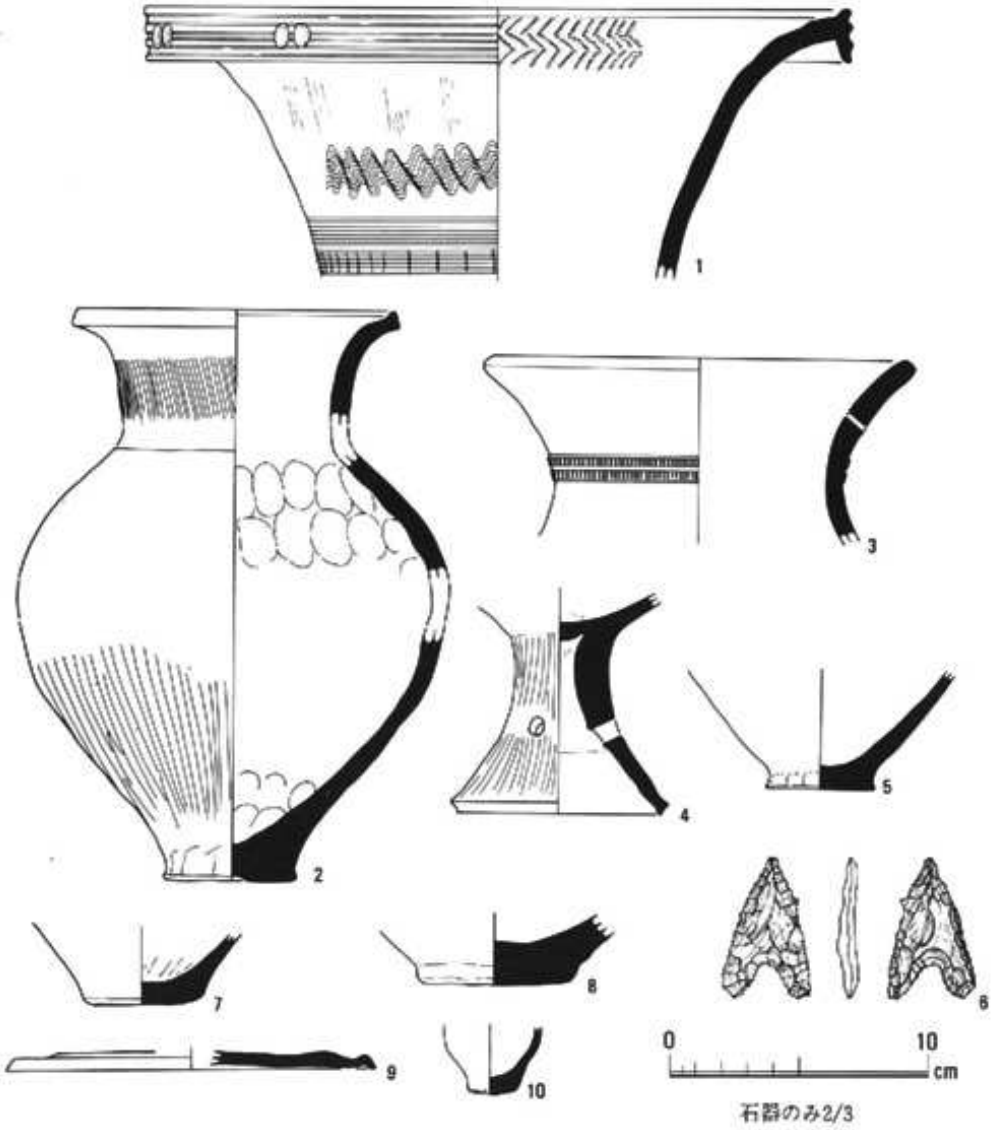
II区とIII区が接する部分で検出された溝で、幅1.70m、深さ0.55mをはかる。埋土はオリーブ黒色粘土の単純層である。出土遺物は全く無く時期は不明である。

第3節　出土遺物

検出した遺構のうち出土遺物のあった遺構に03－ＯＲ、04－ＯＳ・05－ＯＸがある。また包含層および廿池内の表採資料に僅かではあるが土器類他を検出した。以下遺構毎に出土遺物についてのべる。

03－ＯＲ

03－ＯＲからは弥生土器・石鏃・木製品の他、種子・昆虫遺体の自然遺物が認められた。



1～6．03-OR　7．04-OS　8．05-OX　9・10．包含層

第10図　03－ＯＲ他出土遺物

弥生土器（第10図１～５・７・８　図版12）

破片数で44点を数える。うち６点の図化が可能であった。１は壺の口縁部である。復元した口縁部の直径27.2cmをはかる。口縁部は外反ぎみに立ち上がり、端部の断面は「T」字形を呈する。口縁端部の外面には３条の凹線文を施し、２個一組の円形浮文を内面には綾杉状の烈点文を３帯施している。頸部には上より櫛描波状文・直線文・簾状文が施されている。焼成はやや軟質で色調は淡黄色を呈している。胎土にはクサリ礫を含んでいる。弥生中期中頃の所産であろう。

２は壺である。破片を復元して図化することによってほぼ全体の形状を推測することが可能である。復元した口縁部の直径12.0cm、高さ約22cmをはかる。口縁部は外反し口縁端部は上方へつまみあげられている。体下半部はやや直線的に外傾して立ち上がり、体部上半部は丸味を持つ。底部はドーナツ状の上げ底である。頸部の外面には縦方向のハケ目、体部の外面の上半部はナデ調整、下半部はヘラケズリが施されている。肩部の内面には指頭圧痕が明瞭に残る。焼成は硬質で色調は灰白色を呈する。胎土は精良である。弥生中期の所産であろう。

３は壺の口縁部である。復元した口縁部の直径16.0cmをはかる。頸部から屈曲して大きく外反する口縁部を有する。口縁部の外面の上半はヨコナデ、下半はヘラミガキが施され、口縁部の内面は板ナデの後ヨコナデが施される。頸部には削り出し凸帯を施し、その中央に沈線をめぐらすことによって外見上は２条にみせている。更に削り出し凸帯上には細かい刻目が施されている。なお口縁部上方には焼成前の紐穴を一対穿っている。焼成は良好で色調は暗灰黄色を呈する。胎土には雲母を多く含んでおり生駒西麓産と考えられる。弥生前期後半の所産であろう。

４は高杯の脚部である。底部の直径7.50cmをはかる。中空の脚柱部下方から斜めに開く裾部を持つ。裾部には３ヶ所に円形の透し孔がみられる。杯部との接合は円板充塡法によっている。外面は縦方向のヘラミガキの後、ナデ調整が施されている。焼成は良好で良く焼きしまっており色調は黄褐色を呈する。胎土には雲母を含んでおり生駒西麓産と考えられる。弥生中期中葉の所産であろう。

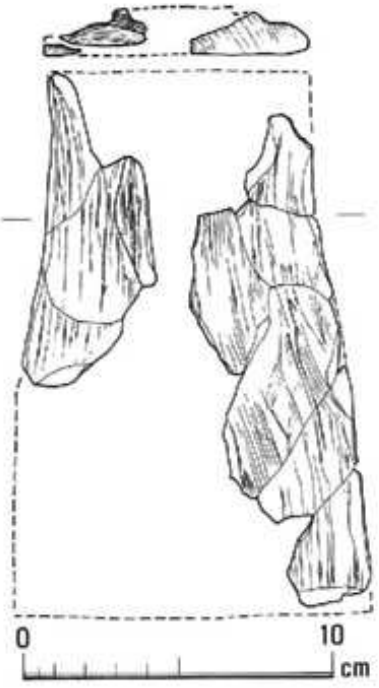
５は壺の底部である。底部の直径4.20cmをはかる。全体に剝落が著しく調整は不明である。焼成は硬質で色調は浅黄橙色を呈する。胎土には赤色粒を含んでいる。弥生中期であろうか。

石鏃（第10図６　図版13下）

サヌカイト製の凹基式の打製石鏃である。長さ2.65㎝、幅1.70㎝、重さ1.11ｇをはかる。そのつくりからみて縄紋時代の所産と考えられる。

木製品（第11図　図版13上）

細片となっているが舟型突起と思われるふくらみもあり、その形状からみて広鍬の未製品と考えられる。復元すると刃部が裾広がりで台形状を呈すると推定される。復元した長さ約35㎝、幅約23㎝をはかり広鍬であるとすればかなり大形の部類に属している。



第11図　03－ＯＳ出土木製品

種子（図版14－１～19）

03－ＯＲから出土した種子については、調査担当者が採集し抽出したものについて大阪市立大学教授粉川昭平先生に鑑定を依頼し、その結果を口頭でいただいた。そのうち主たるもの19点については図版14に掲載した。以下結果のみについてのべる。

裸子植物

イチイ科	カヤ	*Torreyanucifera.*	図版14－18

被子植物

クルミ科	オニグルミ	*Juglans sieboldiana.*	図版14－１
ヤマモモ科	ヤマモモ	*Myrica rubra.*	図版14－11
ブナ科	カシ属	*Quercus sp.*	図版14－３～15
	ナラ属	*Quercus sp.*	
	ツブラジイ	*Castanopsis cuspidata.*	図版14－６
クスノキ科	クスノキ	*Cinnamomum camphora.*	図版14－８
バラ科	リンボク	*Prunus spinulosa.*	図版14－９
	ヤマザクラ	*Prunus jamasakura.*	図版14－10
ヤマモモ科	ヤマモモ	*Myrica rubra.*	図版14－11
マメ科	フジ属	*Wistaria sp.*	図版14－14
トウダイグサ科	アカメガシワ	*Mallotus japonicus.*	図版14－15
ムクロジ科	ムクロジ	*Sapindus mukrossi.*	図版14－19

ブドウ科	ノブドウ	*Ampelopsis brevipedunculata*	図版14－17
ツバキ科	ヤブツバキ	*Camellia japonica*	図版14－2
ミズキ科	クマノミズキ	*Cornus brachypoda*	図版14－16
ハイノキ科	ミミズバイ	*Symplocos glauca*	図版14－7
エゴノキ科	エゴノキ	*Styrax japonica*	図版14－13
	ハクウンボク	*Styrax obassia*	図版14－20
ウリ科	マクワウリ	*Cucumis melo*	図版14－12

昆虫（図版14－20）

5点の昆虫遺体が出土した。大阪市立博物館主任学芸員宮武頼夫先生の鑑定によって、それぞれコガネムシの羽、コアオハナグリの羽、カナブンの前胸、ネブトクワガタのオスの牙であることが判明した。このうちネブトクワガタについては、遺存状態が良好であったため図版を作成した。

04－ＯＲ（第10図７　図版12下）

10点の弥生土器片が出土したがうち１点のみ図化が可能であった。７は壷の底部と考えられる。底部の直径4.60cmをはかる。底部は平底で端部は丸味を持ち、内面にはクモの巣状のハケ目が認められる他は器壁の磨滅が著しく調整は不明である。色調は浅黄橙色を呈する。弥生後期であろう。

05－ＯＸ（第10図８　図版12下）

弥生土器片２点、土師器の細片３点、須恵器の細片１点が出土したがうち弥生土器１点が図化することができた。８は底部の直径6.0cmをはかる。底部は平底で外面には木の葉の圧痕が認められる。色調は灰黄色を呈する。弥生後期の所産であろうか。

包含層出土土器（第10図９・10　図版13下）

包含層から出土した土器片はヘドロ層も含めて弥生土器54点、土師器22点、須恵器12点、瓦器４点、磁器１点があったがいずれも細片で２点が図化できたにすぎない。

９は須恵器杯蓋片であるがつまみ部分を欠損する。復元した口縁部の直径14.2cmをはかり灰色を呈する。奈良時代のものであろう。10は弥生土器のミニチュアの壷の体部下半部である。底部の直径1.90cm、現存高2.60cmをはかる底部は平底である。色調は褐灰色を呈する弥生後期の所産であろう。

その他、廿池内では石鏃を含んで弥生時代から現代に亘る土器の表面採集が可能であったそのうち代表的なものについては図版14の下に掲げておいた。

第Ⅳ章　まとめ

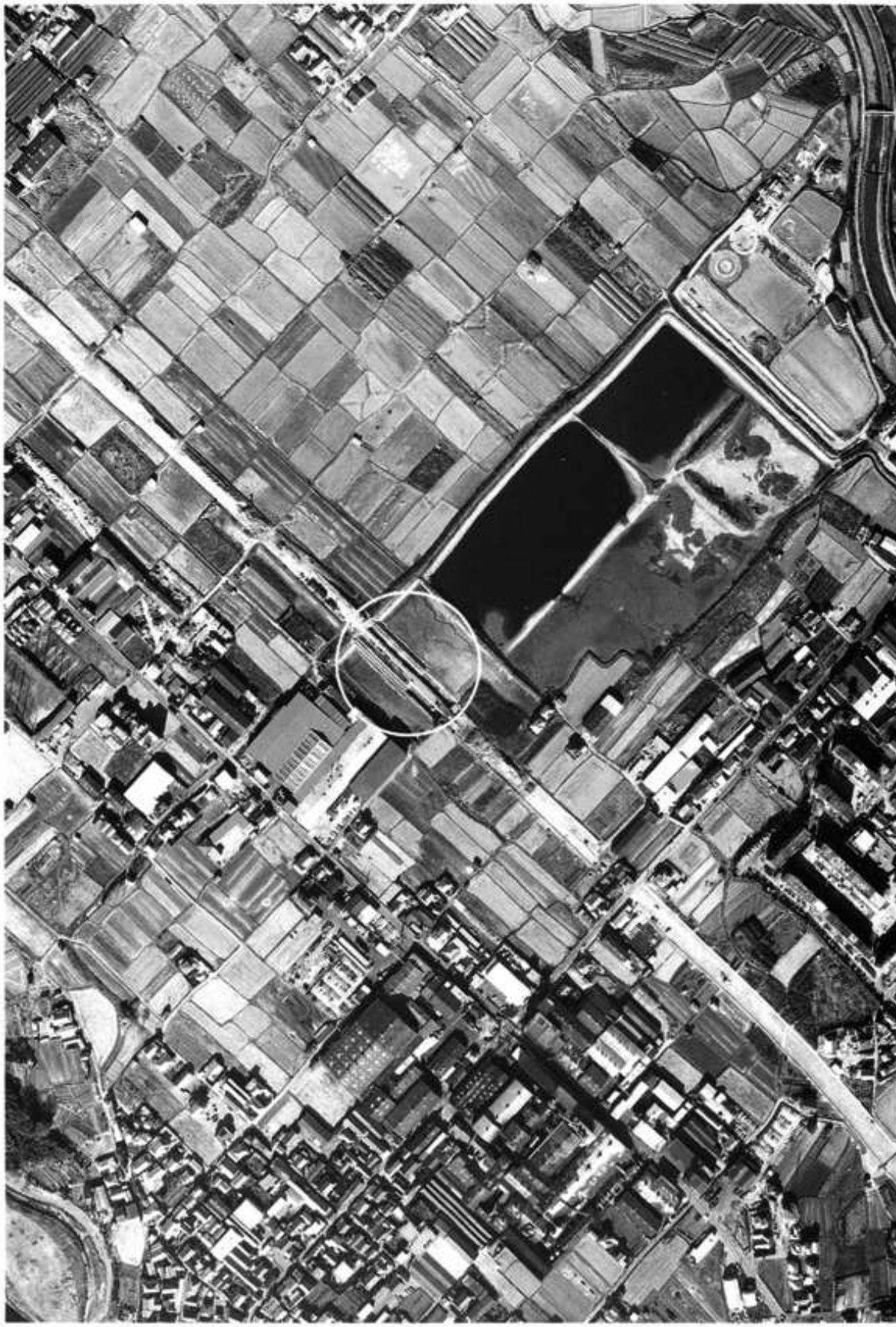
発掘調査で検出された遺構のうち年代の判明したものはすべて弥生時代に属している。この時期の住居址は周辺の遺跡では先の軽部池西遺跡、山ノ内遺跡、今木遺跡において検出されているが、弥生時代中期に属するものも一部はあるがその中心は後期に属するものが主体で、牛滝川の段丘の開発がこのころになって盛んになったことは明らかである。この点では03－ＯＲから出土した弥生時代前期に属する土器は僅かに１点ではあるものの、これまでの府道磯之上山直線の発掘調査では初めての検出例であり、今回の調査によって小規模ではあるものの弥生時代の全期間の人々の生活の跡をたどることが可能となりこの土器の持つ意味は小さくないといえる。

一方、検出された遺構は自然の流路が主体で、03－ＯＲを除いては年代を推定する手がかりはなく多くを語ることは不可能である。このため各流路について花粉分析を実施した。以下、この結果にもとづいて流路が埋没する頃の周辺の植性をのべることによってまとめとしたい。

01－ＯＲ、02－ＯＲでの花粉分析結果は大きくみると差はない。水辺にはコウホネ属などの水草が育成し、周辺部の湿地にはイネ科やカヤツリグサ科、ゴキズル属などの雑草が育成し、やや高いところにはヨモギなどキク科の雑草などが育成していたと考えられる。また、沼の周辺にはエノキ属－ムクノキ属を主要素とする河辺林が局所的に育成していたと考えられる。低地から丘陵にはニヨウマツ亜属やコナラ属を主要素とする二次林が広がっていたと考えられ、山地にはモミ属、ツガ属、スギ属などを主要素とする中間温帯林が分布していたらしいことが知られた。03－ＯＲでは草本花粉の出現種類が少ないことから湿地内の詳細は明らかでないが、オモダカ属やイネ科、カヤツリグサ科の雑草が育成していたと考えられる。低地から丘陵にかけてはアカガシ亜属を主要素とする照葉樹林が分布しており、シイノキ属はあまり多くなかったと考えられる。また山地にはモミ属、ツガ属、スギ属などを主要素とする中間温帯林が分布していたらしいことが知られた。

最後に発掘調査を実施する前の興味の一つに甘池の築造時期の解明があったが、堤を立ち割ることは不可能であり、しかもヘドロ層が地山まで達していたためこの問題については先送りせざるを得なかったことを付け加えておきたい。

図　　版

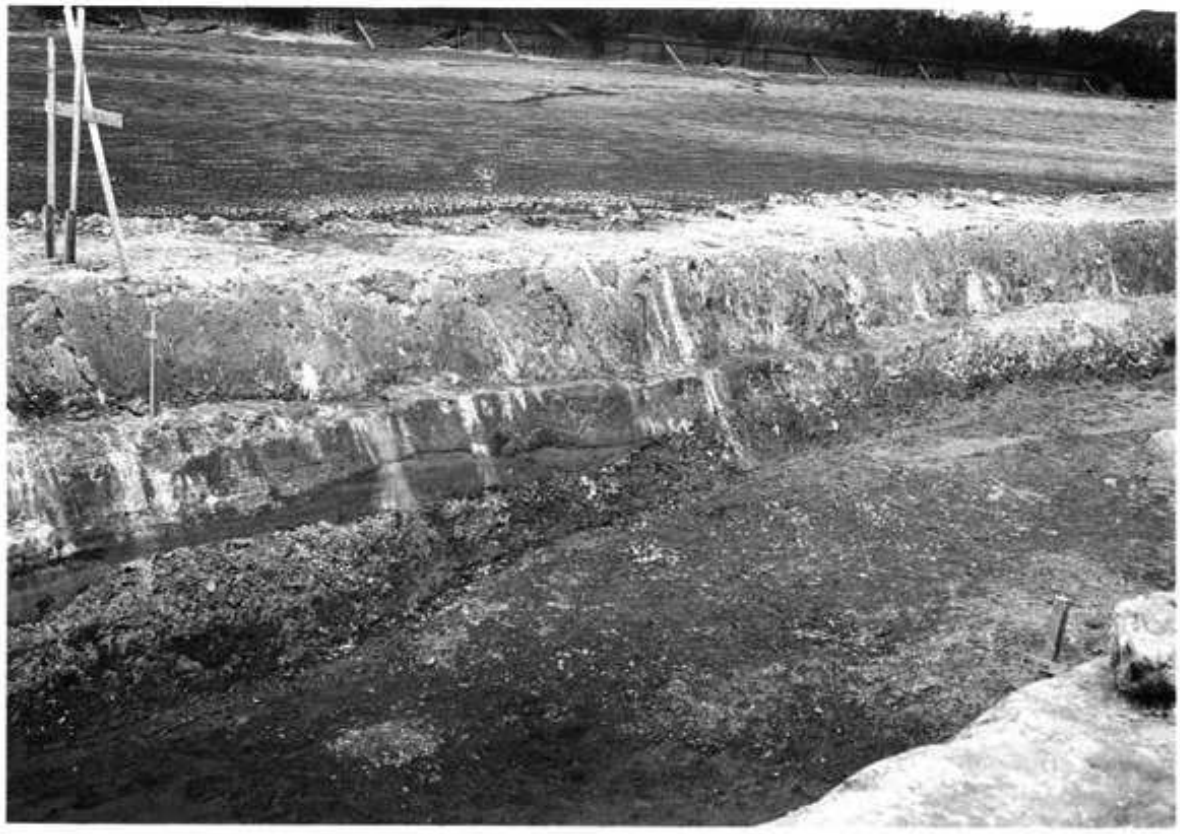


図版一　軽部池西遺跡と周辺の航空写真

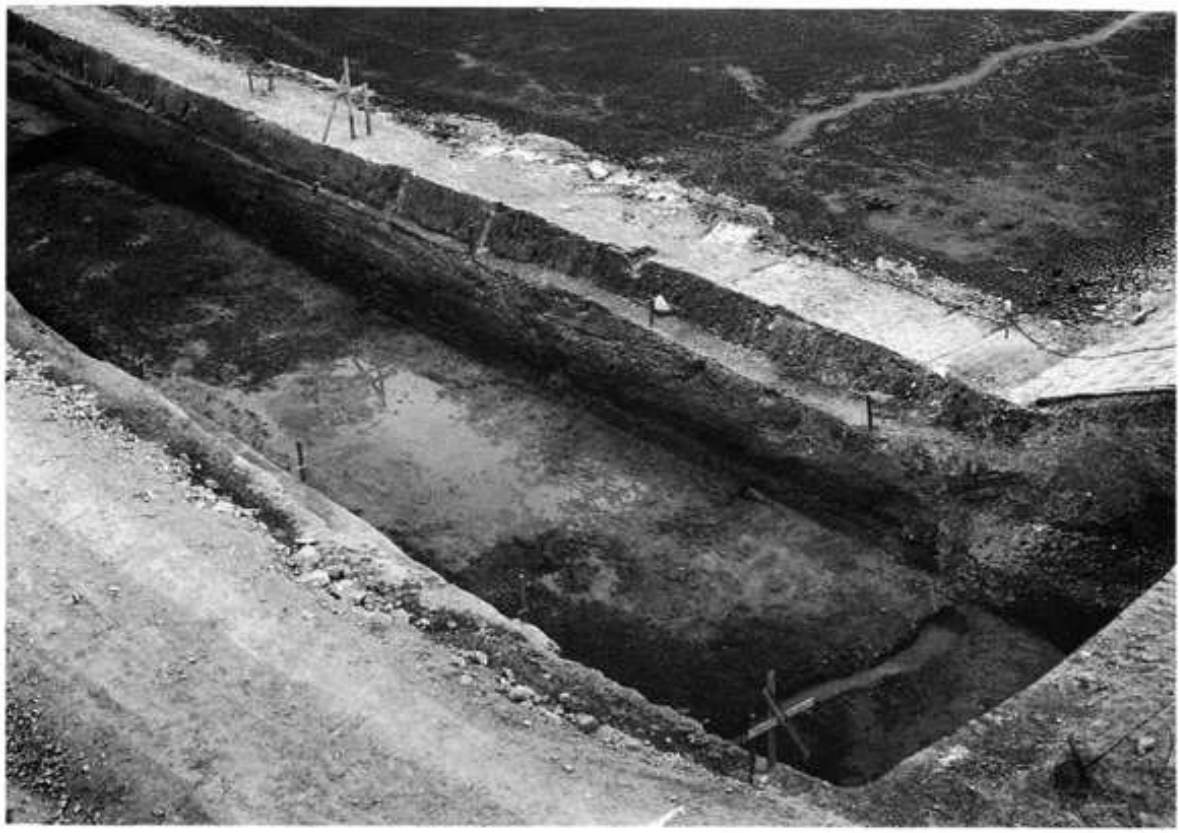
01-OR

01-OR断面

01-OR肩部



01-OR肩部断面



01-OR

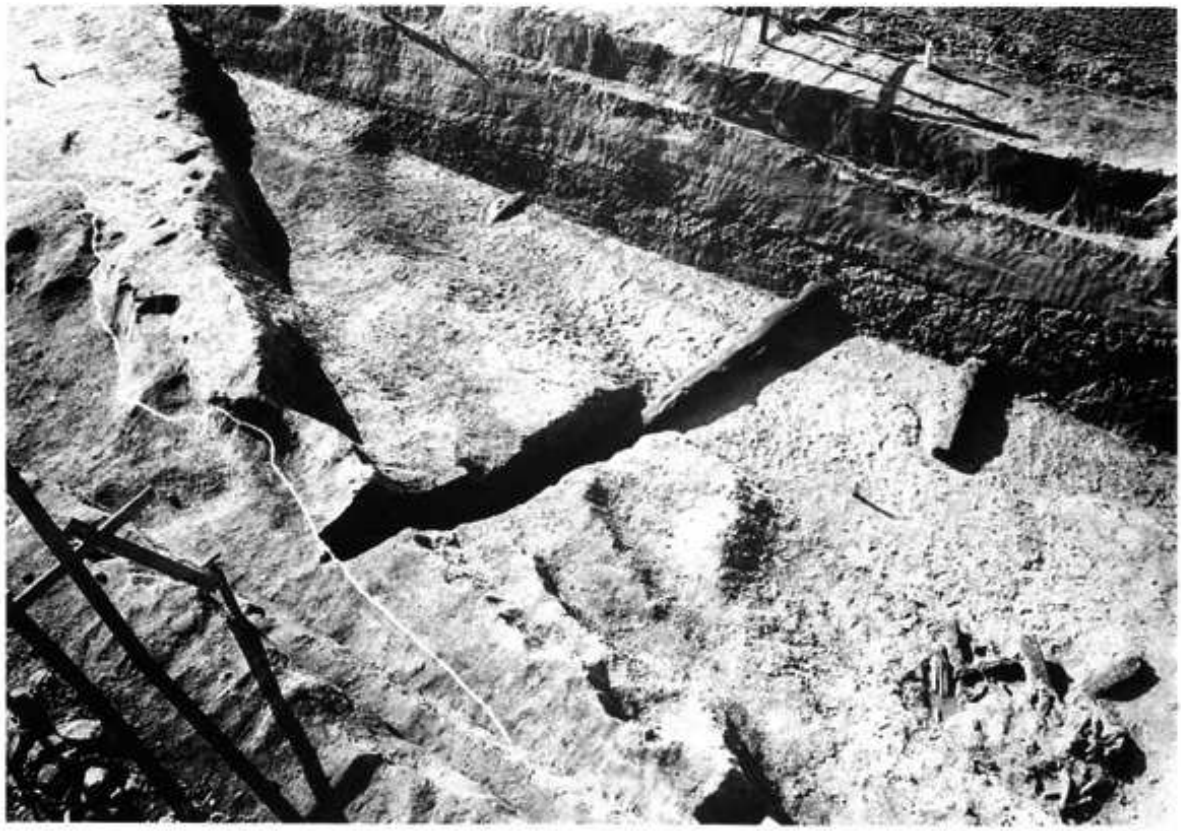
01-OR断面

図版五　遺跡　Ⅱ区

01-OR

01-OR断面

01-OR



01-OR自然木出土状況

図版七　遺跡　Ⅰ・Ⅱ区

02-OR

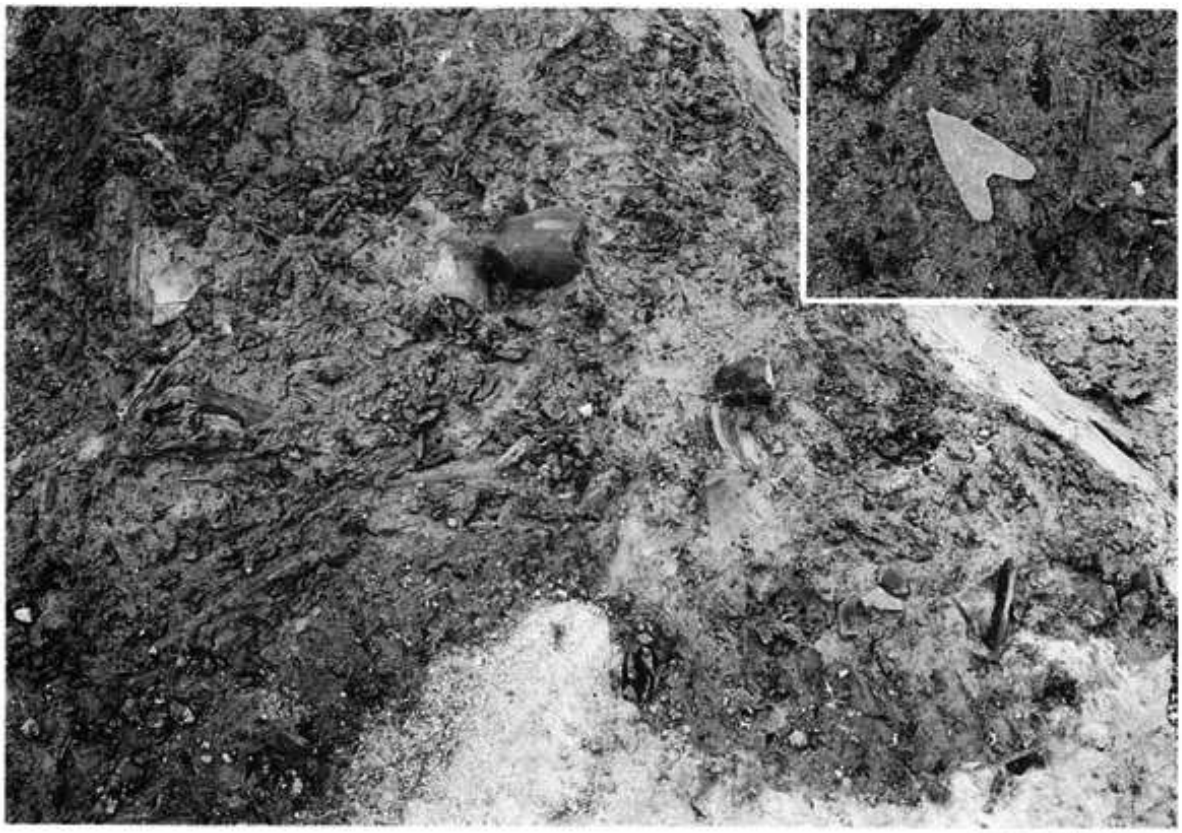
02-OR

図版八　遺跡　Ⅱ区

02-OR

02-OR断面

03-OR断面

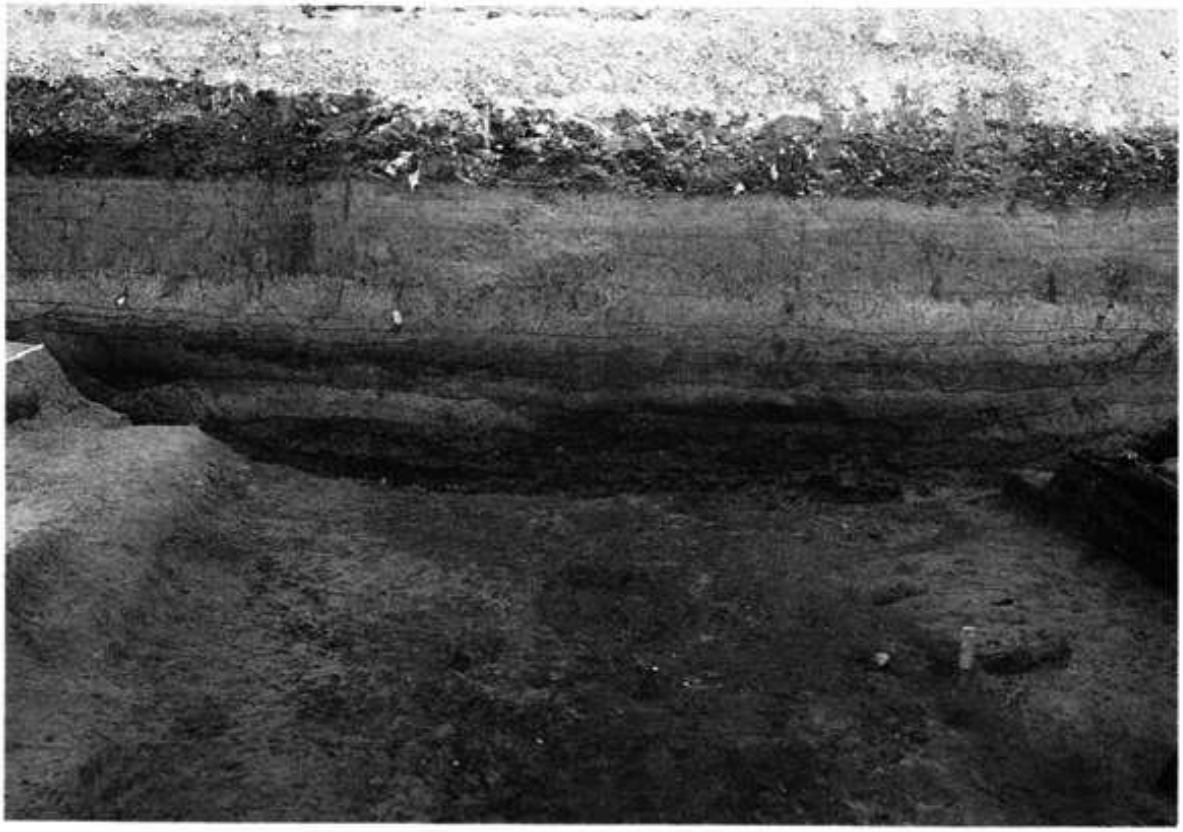


03-OR遺物出土状況

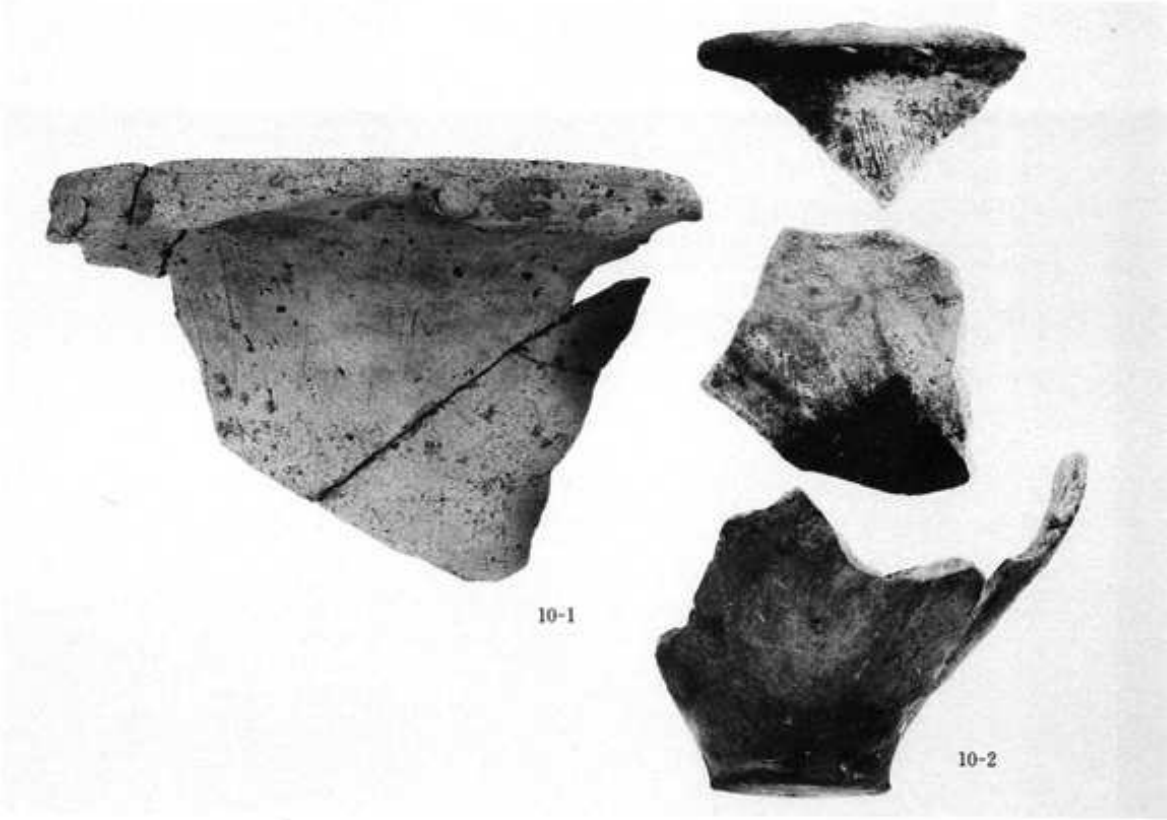
03-OR土器出土状況

同　上

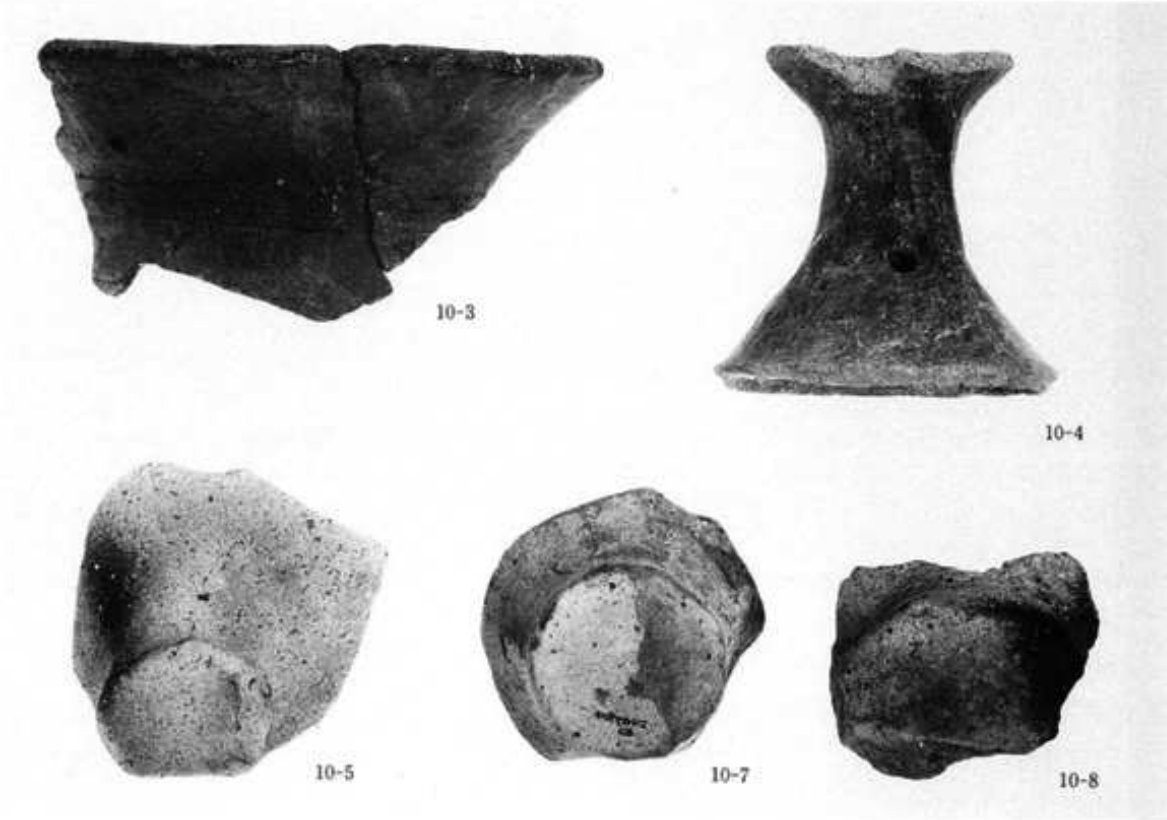
03-OR



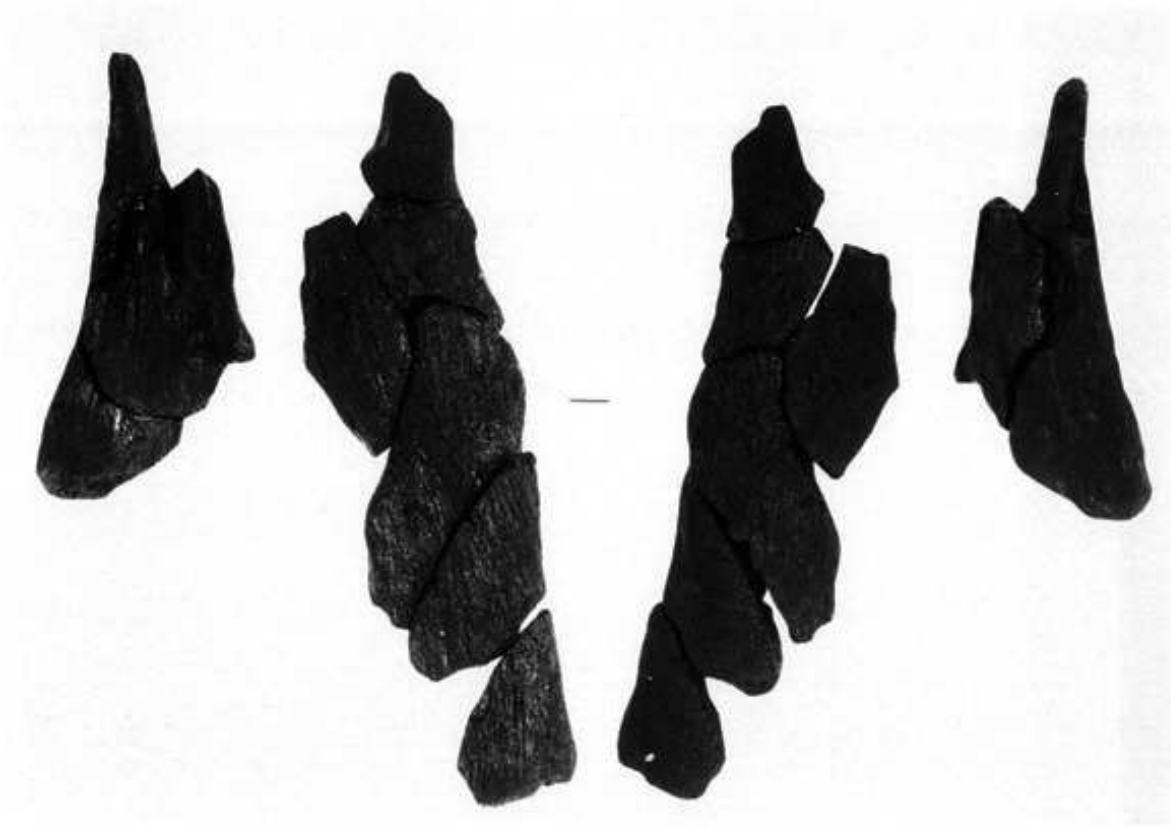
03-OR断面



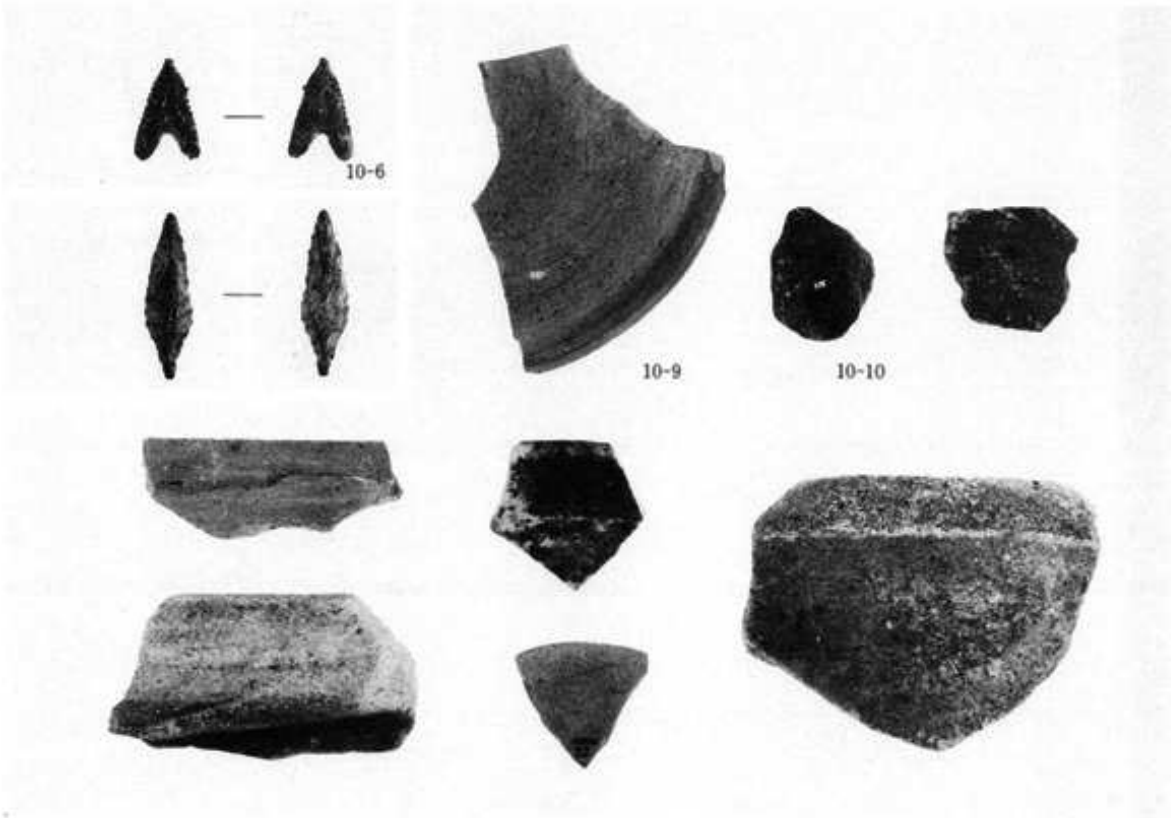
03-OR出土土器



03-OR・04-OS・05-OX出土土器



03-OR出土木製品



03-OR出土石器と包含層廿池内表採遺物

1　オニグルミ

2　ヤブツバキ

3　常緑のドングリ

4　落葉のドングリ

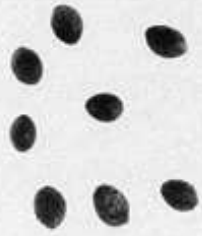
5　ドングリの幼芽

6　ツブラジイ

7　ミミズバイ

8　クスノキ

9　リンボク


10　ヤマザクラ

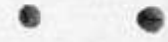
11　ヤマモモ

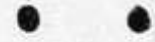
12　マクワウリ

13　エゴノキ

14　フジの芽

15　アカメガシワ


16　クマノミズキ


17　ノブドウ

18　カヤ

19　ムクロジ

20　ハクウンボク

21　ネブトクワガタ

(財)大阪府埋蔵文化財協会報告書　第51輯
都市計画道路・府道磯之上山直線建設に伴う

軽部池西遺跡 II

—発掘調査報告書—

平成2年3月31日

編集・発行　財団法人 大阪府埋蔵文化財協会
大阪市中央区谷町2丁目2－20番地

印　　刷　株式会社　中島弘文堂印刷所